序　章

1. 本稿の目的と研究方法

本稿では、現代日本語のアスペクトを表す形式「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」(動詞に「ーテイル」の下接した構文成分(以下では「シテイル」と示す))と、次に示すような現代韓国語のアスペクトを表す形式について対照を行う。

(1)　現代韓国語のアスペクト形式

①「han-ta(한다)」と「hayss-ta(했다)」[*1]

「han-ta(한다)」:「動詞語幹-nu(ㄴ)-ta」[*2]
以下では「han-ta」と呼ぶ。
現代日本語の「スル(完成相非過去)」に相当する。

「hayss-ta(했다)」:「動詞語幹-ess(었)-ta」
以下では「hayss-ta」と呼ぶ。
現代日本語の「シタ(完成相過去)」に相当する。

②「hako iss-ta(하고 있다)」と「hako iss-ess-ta(하고 있었다)」
「hay iss-ta(해 있다)」と「hay iss-ess-ta(해 있었다)」

「hako iss-ta(하고 있다)」:
「動詞語幹-ko iss(고 있)-ta」
以下では「hako iss-ta」と呼ぶ。

---

*1　韓国語のローマ字表記には、Martin et al. 1967 の表記法(Yale 式)を用いる。

*2　中世韓国語の母音「ㆍ(아래 아)」は、歴史的に「ㆍ>ㅡ(u)」「ㆍ>ㅏ(a)」と変化しており、本稿では、「(ㆍ>)ㄴ(nu)」を代表形態とする。より詳しい説明は第五章を参照されたい。

現代日本語の「シテイル(継続相非過去)」に相当する。
一般的に動作継続を表す。

「hako iss-ess-ta(하고 있었다)」:「hako iss-ta(하고 있다)」の過去形

「hay iss-ta(해 있다)」:「動詞語幹-e iss(어 있)-ta」
以下では、「hay iss-ta」と呼ぶ。
現代日本語の「シテイル(継続相非過去)」に相当する。
一般的に結果継続を表す。

「hay iss-ess-ta(해 있었다)」:「hay iss-ta(해 있다)」の過去形

③「hayss-ta(했다)」と「hayss-ess-ta(했었다)」

「hayss-ta(했다)」:「動詞語幹-ess(었)-ta」
現代日本語の「シテイル(単純状態・パーフェクト)」に相当する。
主に「単純状態」と「動作パーフェクト(いわゆる経験・記録)」を表す(以下では、「現在の状態」を表す「hayss-ta」と呼ぶ)。

「hayss-ess-ta(했었다)」:「hayss-ta(했다)」の過去形

現代韓国語に関しては、③の「hayss-ta(했다)」について、①の完成性過去を表す「hayss-ta」と区別し、別個のアスペクト形式の一つとして考える。このように主張する根拠については後述する(第四章)。本稿では「hayss-ta」に関しては、完成性過去を表す「hayss-ta」と、現在の状態を表す「hayss-ta」の二つとして分けることになる。

「hayss-ta」をめぐる従来の先行研究では、一部の異見はあるものの、主な研究の流れとしては、そのほとんどが「hayss-ta」に関して「過去」を表す形式としてとらえている。本稿の主張内容は、「hayss-ta」の意味を過去だけに限定する意見に対する反論として位置づけられる。

本稿では、現代日本語と現代韓国語のアスペクト体系を研究対象としているが、両言語について対照する理由(意義)としては、両言語のアスペクト体系に次のような二つの類似点が見られることがあげられる。

一つは、「シテイル」と「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」は、その形式の中に存在(と所有)を基本意味とする動詞(現代日本語では「イル」、現代韓国語では「iss-ta(있다)」)を補助動詞として含んでいる。このように、日韓両言語におけるアスペクト形式は語構成の面において同じであり、両言語には、「存在型アスペクト形式」を有するという類似点が見られる。

もう一つは、両言語における、主に過去を表す形式とされる「タ」と「-ess(었)-」の歴史的な成立過程が類似していることがあげられる。現代韓国語の「-ess-」は歴史的な観点から見ると、(2)のような成立過程があったと考えられている。

(2)　「-e is(어 잇)-」＞「-eys(엣)-」＞「-es(엇)-」＞「-ess(었)-」

中世韓国語(15 世紀)の「-e is-」は、現代韓国語における「-e iss(어 있)-」の祖形であり、日本語における(「テアリ」＞「タリ」＞「タ」)の歴史的な成立過程とかなり類似している。ここで、日韓両言語の歴史的な成立過程が類似していると言える根拠としては、中世韓国語の「-e is-」における「is-ta(잇다)」は存在動詞であり、この「is-ta」が文法化(grammaticalization)することによって現代韓国語の「-ess-」が成立しており、現代日本語の「タ」の成立過程と類似している、ということがあげられる。(アスペクト形式からテンス形式への文法化)

以上で述べたように、現代の日韓両言語におけるアスペクト形式は、いずれも「存在型アスペクト形式」を有しており、一般的に過去を表す形式とされる「タ」と「-ess(었)-」の歴史的な成立過程も類似している。

また、具体的な内容は第一章以降で述べるが、「スル」と「han-ta」、「シタ」と「hayss-ta(했다)」及び「シテイル」と「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」という両言語のアスペクト形式が表す意味には、かなりの共通点が見られる。

しかし、現代日本語の「シテイル」と現代韓国語の「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」及び現代日本語の「シタ」と現代韓国語の「hayss-ta(했다)」には、以下に示すような違いも見られる。

(3)　다로는 아버지를 닮았다.(* 닮고 있다 / *닮아 있다)[*3]

talo-nun apeci-lul talm-ass-ta.　(*talm-ko iss-ta / *talm-a iss-ta)

太郎 は父　を 似るタ　　似るテイル　　似るテイル

太郎はお父さんに似ている。

(4)a　太郎はお父さんに似ている。

b * 太郎はお父さんに似た。[*4]

(3)と(4)a は、単純状態を表す例である。現代韓国語では、(3)に示したように、現代日本語の「シテイル」形にあたる「hako iss-ta(하고 있다)」形・「hay iss-ta(해 있다)」形がいずれも成立せず、「hayss-ta(했다)」形だけが成立している。現代日本語は、現代韓国語とは対照的に「シテイル」形だけが成立しており、(4)b のような「シタ」形は一般的に成立しない表現である。(3)と(4)に関しては、日韓両言語が対照的であることがよく分かる。

(5)　(太郎が既婚者であることを語る場面)

다로는 10 년 전에 결혼했다.(* 결혼하고 있다 / * 결혼해 있다)

talo-nun 10-nyen-cen-ey kyelhonhay-ss-ta. (*kyelhonha-ko iss-ta / *kyelhonhay iss-ta)

太郎は 十年　前　に 結婚する　タ　　結婚するテイル　　結婚するテイル

太郎は十年前に結婚している。

(6)a　(太郎が既婚者であることを語る場面)

太郎は十年前に結婚している。

b * 太郎は十年前に結婚した。[*5]

(7)　(自殺した人の死因に対する検屍報告を読んでいる場面)

이 사람, 청산가리를 먹었습니다.(*먹고 있습니다/ *먹어 있습니다)

i salam chengsankali-lul mek -ess-supnita　mek -ko iss-supnita mek -e iss-supnita

この人 青酸カリ　を 食べるタ ます　　食べるテイル　　食べるテイル

この人、青酸カリを飲んでいます。

---

*3　出典が記されていない韓国語に関する例文は作例である。作例については、筑波大学に在籍している韓国人留学生 20 人に対してインフォーマント調査を行っており、そのうち 15 人以上が成立すると判断した例文だけを本稿に掲載している。

4 「」は、文法的に成立しない表現である(自然な表現ではない)ことを表す。

*5　この文については、現在の状態までは含意しないという意味で非文にしている。

(8)a （自殺した人の死因に対する検屍報告を読んでいる）
この人、青酸カリを飲んでいます。
b * この人、青酸カリを飲みました。[*6]

(5)と(6)a 及び(7)と(8)a は、いわゆる経験・記録用法(動作パーフェクト)を表す例である。これらの例から分かるように、現代韓国語の「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」には、いわゆる経験・記録用法(動作パーフェクト)を表す用法がなく、現代日本語の「シタ」形に相当する「hayss-ta(했다)」形で表現する。これらの表現についても日韓両言語が対照的であることがよく分かる。

現代の日韓両言語におけるアスペクト形式は、いずれも「存在型アスペクト形式」を有しており、一般的に過去を表すとされる「タ」と「-ess(었)-」の歴史的な成立過程も類似していながら、両言語にはなぜこのような違いがあるのだろうか。本論文の最終的な目的は、この問題について、その理由を明らかにすることである。

具体的な研究方法としては、日韓両言語のアスペクト形式に用いられる「イル」と「iss-ta」という補助動詞(存在動詞)について「文法化(grammaticalization)の度合いに差があるかどうか」という観点から考察を行う。[*7] アスペクト形式を構成する「存在動詞の文法化」については、金水(1996b)に従い、次のように定義する。

(9) 存在動詞の文法化
「今」「ここ」における対象の存在が強く含意されるほど原型的意味に近く、「今」「ここ」が薄まるほど、文法化が進んでいる。
(金水(1996b), p. 59)

結論的には、現代韓国語のほうが、現代日本語に比べて相対的に文法化が進んでいない(存在動詞の固有の意味・機能が残っている)ことを指摘し、このよ

*6 現代日本語の「シテイル」の記録用法は、事象が実現された経過を把握できていなければ「シタ」形は使えない。
*7 「文法化(grammaticalization)」に関しては、第一章で詳しく述べる。

うな日韓両言語間に見られる文法化の度合いの差が、前述したような違いをもたらしている、ということについて明らかにする。

2. 本稿の構成と概要

本稿は、序章を含めて全体が八つの章で構成されている。

序　章
第一章　テンス・アスペクトに関する一般的論議
第二章　「ある/いる」と「iss-ta(있다)」
第三章　「シテイル」と「hako　iss-ta(하고　있다)」「hay　iss-ta(해　있다)」
第四章　「シタ」と「hayss-ta(했다)」
第五章　「スル」と「han-ta(한다)」
第六章　「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系 —アスペクト形式の分布の偏りについて—」
結　章

第一章以下の各章で明らかにする内容は次の通りである。

第一章では、本稿で使用する用語の定義を行う。定義する用語は次のようである。

「テンスとアスペクト(を表す形式)」
「完成相」
「継続相」
「パーフェクト(いわゆる完了)」
「パーフェクト相」
「文法化」

第二章では、現代日本語の存在動詞「ある」「いる」と、現代韓国語の存在動詞「iss-ta(있다)」について考察する。主文の述語として用いられる場合と、アスペクトを表す形式の補助動詞として用いられる場合の二つに分けて、両言語間の共通点や相違点について明らかにする。

第三章では、現代日本語の「シテイル」と現代韓国語の「hako　iss-ta(하고　있다)」「hay　iss-ta(해　있다)」をめぐって、これらのアスペクト形式を構成す

る「存在動詞の文法化」という観点から対照を行う。

具体的には、①動詞の項構造(argument structure)に、存在場所を表す項(現代日本語では「ニ格」名詞句、現代韓国語では「ey(에)格」名詞句)が含まれているかどうか、②結果状態を表す表現と、存在場所を表す項が共起可能かどうか、という①と②の基準をもって、「シテイル」構文と「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」構文を三つのタイプに分けた上で、とりわけ、現代韓国語は、現代日本語に比べて相対的に「(アスペクト形式を構成する)存在動詞の文法化の度合い」が低いということについて明らかにする。

さらに、現代韓国語では、小説やドラマなどのシナリオの地の文という条件付きではあるが、動作継続を表す「hako iss-ta」「hay iss-ta」構文が存在場所を表す「ey 格」名詞句と共起可能であることについて述べる。このような例の存在も、現代韓国語の「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」は、これらの形式を構成する存在動詞「iss-ta(있다)」の文法化が、現代日本語に比べて相対的に進んでいないことを示す証拠になることについて触れる。

第四章では、まず、現在の状態を表す「シタ」や「hayss-ta(했다)」については従来、如何にとらえられてきたか、如何なる点が注目されてきたか、個々の論考を検討しながら、その問題点を指摘する。その後、現代日本語の「シタ」と現代韓国語の「hayss-ta」をめぐって以下の<図 1>に示すような違いがあることについて検討し、なぜ、両言語間にはこのような違いがあるかについて考察する。

<図 1>

	現代韓国語	現代日本語
単純状態	「hayss-ta」形	「シテイル」形
(動作)パーフェクト現在	「hayss-ta」形	「シタ・シテイル」形

結論としては、第三章で述べたような日韓両言語のアスペクトを表す形式に見られる「存在動詞の文法化の度合い」の差がこのような違いをもたらす、ということについて明らかにする。具体的な内容は次のようである。

まず、前提となるのは、「hako iss-ta(하고 있다)」や「hay iss-ta(해 있다)」を構成する「iss-ta(있다)」には固有の語彙的な意味・機能が残っているという要因である(第三章)。(本稿では、現代韓国語を対象とするが、現代語のアスペクト形式に語彙的な意味・機能が残存しているということは、歴史的にさかのぼっても事情は変わらないであろう。)

「hako iss-ta(하고 있다)」や「hay iss-ta(해 있다)」を構成する「iss-ta(있다)」には固有の語彙的な意味・機能が残っている(当然ながら、存在文的な特徴を示す)ため、非存在文的な単純状態やパーフェクト現在を「hayss-ta(했다)」で表現するようになって現在に至っている。

単純状態やパーフェクト現在を「hayss-ta(했다)」で表現できるようになったのは、「-e is(어 잇)-」＞「-eys(엣)-」＞「-es(엇)-」＞「-ess(었)-」という文法化過程において、二重母音が単母音化することによって存在動詞が認識されなくなった(「-e is-」と「-eys-」が同じように発音されなくなった)ためである。

第五章では、現代日本語の「スル」と現代韓国語の「han-ta(한다)」について対照を行う。「han-ta」(現代日本語の「スル」にあたる)には動作継続を表す用法があることを取りあげ、「hako iss-ta(하고 있다)」(現代日本語の「シテイル」にあたる)とはどう違うか、という問題について考察する。とりわけ、「存在動詞の文法化」と関連し、「hako iss-ta」には「iss-ta(있다)」の意味・機能が含まれている可能性があることについて明らかにする。

第六章では、中世末期日本語と現代韓国語をアスペクト的な観点から観察すると、いくつかの共通点が見られることを指摘する。両言語とも、主に過去を表す形式「シタ」形と「hayss-ta(했다)」形や動詞の基本形と「han-ta(한다)」形が、主節末で以下のような現在の状態を表す場合があることについて述べる。

「シタ」形と「hayss-ta(했다)」形が表す意味(現在の状態)
　　「単純状態」
　　「動作パーフェクト」

「動詞の基本形」と「han-ta(한다)」形が表す意味(現在の状態)
　　「動作継続」

また、動詞のアスペクト的意味を変更する(状態化する)形式である「シテイル」「シテアル」・「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해 있다)」が表す現在の状態の意味と、「シタ」形・「hayss-ta(했다)」形や動詞の基本形・「han-ta(한다)」形が主節末で表す現在の状態の意味とを比べ、両者には分布の偏りがあることについて指摘する。

両言語の「シテイル」「シテアル」・「hako iss-ta(하고 있다)」「hay iss-ta(해

있다)」という「存在型アスペクト形式」を構成する存在動詞(「イル」「アル」「iss-ta」)は、「内容語から機能語への文法化」が、現代日本語に比べれば相対的に進んでおらず(固有の語彙的な意味・機能をもっており)、全体的な傾向として存在文的(存在様態)な特徴を示す。また、両言語の「存在型アスペクト形式」は、存在文的な性質をもっているため、「単純状態」や「動作パーフェクト」のような非存在文的な表現は、存在型アスペクト形式では表すことができず、「シタ」形と「hayss-ta(했다)」形で表す、という分布上の偏りがあることについて明らかにする。

結章では、本稿の考察によって明らかになった内容を総括し、日韓両言語のアスペクト形式の表す意味の違いについて如何にとらえるべき現象なのかを論じるとともに、今後の課題について触れる。